

補論 1 雑穀・米の語義と用語法

穀物をめぐる語義と用語法が時空間によって変遷しているので、まず基本的な用語について、検討しておく。

1. 禾と穀の語義と用語法

禾はすでに国語辞典には項目がない {注 1, 2}。漢和大辞典 {注 3} では本来アワの穂を示す象形文字、新版漢語林 {注 4} では穂先が茎の先端にたれかかる象形で、イネの意味をあらわすとしている。古代中国では粟が主要な食料であったから、アワと理解するのが妥当であろう {注 5}。

注 1： 新村出編 1998、広辞苑第五版、岩波書店。か【禾】の項目はなく、のぎ【芒】の項に「禾」とも書くとある。こく【穀】田畑で作り、実を主食とする植物の類。米・麦・豆など。

注 2： 金田一京助・柴田武・山田明雄・山田忠雄 1991、三省堂。か【禾】項目はない。こく【穀】田畑で作り、常食とするイネ・ムギ・アワ・ヒエなど。

注 3. 藤堂明保編 1978、学研漢和大字典、学習研究社。【禾】穂のたれたあわの形を描いた象形文字。①あわ、②いね、③禾本科の植物、または穀物の総称。【穀】田畑で作り、常食とするイネ・ムギ・アワ・ヒエなど。

注 4： 鎌田正・米山寅太郎 1987、新版漢語林、大修館書店。【禾】穂先が茎の先端にたれかかる形にかたどり、イネの意味をあらわす。①いね（稲）、②穀物、穀類の総称、③なえ（苗）、穀物の苗、④わら、穀類の茎、⑤穀物の穂が出たもの。【穀】①穀物、②食物、③よい（善）、また、よくする、④やしなう（養）、⑤いきる（生）、⑥さいわい、⑦扶持米、⑧年少の召使。

注 5： 汜勝之 BC1、(岡島秀夫・志田容子訳 1986)、汜勝之書、農山漁村文化協会。【禾】現在はイネ科の総称として使われているが、古代ではアワを意味していたらしい。そのアワも原本では {禾のほか}に 稂、粟、梁米と表現がいくつもある。

2. 米の語義と用語法

現在、米は稲と同一用語のように一般的に扱われているが、米はイネという植物の和名ではなく、稲を精白した食品のことである {注 6, 7}。本来、穀物の小さな粒を示す用語であった {注 8}。従って、正確にはイネ米、アワ米、ソバ米の様に用いる。植物の和名で記述するときは、他の穀物と同じようにイネと記述すべきである。近年、米が稲のみを示すのは、用語法が変化してきたからであるが、イネのみを米というのは厳密な用語法ではない {注 8, 9}。

注 6： 新村出編 1998、広辞苑第五版、岩波書店。こめ【米】稲の果実。籾殻を取り去ったままのものを玄米、精白したものを白米または精米という。五穀の一とされ、小麦とともに世界で最も重要な食糧穀物。粳は炊いて飯とし、糯は蒸して餅とする。また、菓子・酒・味噌・醤油などの原料。

注 7： 金田一京助・柴田武・山田明雄・山田忠雄 1991、三省堂。こめ【米】イネの実のもみを取り去ったもので、日本人の主食とする重要な穀物。また、酒を作る。うるちとも

ちごめとが有り、前者は米飯に、後者は餅をつくのを使う。

注 8. 藤堂明保編 1978、学研漢和大字典、学習研究社。【米】十印の四方に点々と小さなこめつぶの散った形を描いた象形文字。①穀物の小さなつぶ。こめ・あわ・きびなどにいい、また、菱や、はすの実などにもいう。②いねの実のもみがらを取り去った粒。③小さいつぶ状のもの。④メートル、⑤アメリカ合衆国のこと。

注 9: 鎌田正・米山寅太郎 1987、新版漢語林、大修館書店。【米】甲骨文は、横線と六点とからなり、横線が穀物の穂の枝の部分、六点がその実の部分を示す象形文字で、こめの意味を表す。①稲の実、②穀類（麦・きびなど）の実、また、その脱穀したもの、さらに竹・まこも・はすなどの実もいう、③メートル、④アメリカ合衆国、アメリカ大陸。

3. 雑の語義と用語法

雑には、多くの意味合いが含まれており、多様性や入り混じる、有用でないや賤しい、などの意味に分かれるが、雑穀の用語法としては、前者の多様な穀物を含むものと理解して、後者の有用でなく賤しいという用語法は取らないことにする。

注 10: 新村出編 1998、広辞苑第五版、岩波書店。ざつ【雑】①種々のものの入りまじること。統一なく集まっていること。②主要でないこと。分類しにくいもの。③有用ではないもの。よけいなもの。④あらくて念入りでないこと。

注 11: 金田一京助・柴田武・山田明雄・山田忠雄 1991、三省堂。ざつ【雑】一①はっきりした基準で分類した時、どの項目にもはまらないこと。二㊦入り乱れていて整理されていない様子。㊧細かな所まで行き届いていない様子。

注 12. 藤堂明保編 1978、学研漢和大字典、学習研究社。【雑】①いろいろなものがひと所に集まって入りまじる。入り乱れる。集めていっしょにする。まぜる。②ごたごたしていて、きちんと整っていない。はしたの。③いっしょにとりまぜたさま。

注 13: 鎌田正・米山寅太郎 1987、新版漢語林、大修館書店。【雑】衣服の色彩などの多様なあつまり、まじりの意味をあらわす。①まじる、まじわる。いろいろな色がまじりあう。いりくむ、いり乱れる、純粹でない、まだらである、ぶち、②あう、あわせる、③あつまる、④あらい、⑤こまかい、くくだしい、⑥とも、ともに、みな、⑦いやしい、低俗な。

4. 雑穀の語義と用語法

『日本書紀』(720)では一般に五穀と記されていて、雑穀という用語はなかった。雑穀という用語の初出は『続日本紀』(797)で、律令国家段階でも雑穀という用語は定着しておらず、個別の穀物名で呼称されていた。戦国時代から雑穀の使用例が増えたようだが、近世になっても依然として五穀の方が雑穀よりも使用例が多く、雑穀という用語が定着したのは明治期の 20 世紀になってからのようだ(木村 2003)。

イネとムギ以外の穀類というが、ムギにはパンコムギ以外にもデュラム小麦など 10 数種あるから、パンコムギ以外は雑穀なのだろうか。日本における栽培量からすれば、トウモロコシも世界的な生産量は著しく多いが、それでも雑穀と呼ぶのだろう。日本で通俗的に言えば、現在はオオムギ、赤米・黒米なども雑穀とされている。世間ではイネ以外は大方雑穀という認識である。イネ科穀類でないソバ、センニンコク、キノア、多くのマメ類も雑穀と呼ばれる。たとえば、十六茶のようにである。

世界農業センサス 1950 年の資料では、イネ、コムギやアワの如く、個別穀物ごとに調査が行われており、栽培戸数や栽培面積が記されている。しかし、雑穀の栽培が著しく減少して、1970 年の農林業センサスからは雑穀として一括されるようになった。阪本寧男さんを中心に、私たちが雑穀調査を本格化したのはこのころからである。

雑穀研究会でも、雑穀という用語に疑念がなかったわけではなく、それでも、雑穀をあえて名乗ることにした。たとえば、英語のミレットを使用したからと言って、悪意の雑から逃れられるわけでないのなら、雑が多様性を示す用語と理解して、雑穀を名乗ることが良いとした。日本という冠を会の呼称につけなかったのは、日本に限定した研究範囲にしたくなかったからだ。ただし、英語名には日本をつけて {注:Millet Society of Japan}、日本にも雑穀が栽培されていることを示した。私は植物学者として、植物種と自由、平等に友愛の交わりをしていきたい。雑は生物多様性の意味として用いればよく、中身から差別的認識を変えていくほかはない。

注 14： 新村出編 1998、広辞苑第五版、岩波書店。ざっこく【雑穀】①米・麦以外の穀類。②豆・蕎麦・胡麻などの特称。

注 15： 金田一京助・柴田武・山田明雄・山田忠雄 1991、三省堂。ざっこく【雑穀】コメ・ムギ以外の穀類や、マメ・ソバ・ゴマなどの総称。

注 16： 藤堂明保編 1978、学研漢和大字典、学習研究社。【雑穀】米・麦以外の穀物のこと。

注 17： 鎌田正・米山寅太郎 1987、新版漢語林、大修館書店。【雑穀】の項目はない。

5. 五穀の語義と用語法

『日本農書全集』（全 72 巻、農山漁村文化協会）を見ると、雑穀、五穀ともに使われている。稲は五穀の長として特別に扱われてはいるが、雑穀と五穀は一書のなかでも併用され、五穀の使用例がはるかに多い。粟や稗は五穀であって、雑穀として強く意識はされていなかった。江戸時代には米麦中心、綿や野菜の商品生産に変化していったが、雑穀生産は横這いであった。明治期の 20 世紀になって、雑穀栽培は減少していき、稲・麦に対する雑穀という概念が強く意識されるようになった。敗戦後は、小麦の輸入拡大で、裏作麦栽培は縮小、稲作も 1970 年から減反になった。主穀、五穀、雑穀などというのは、人間の勝手な都合なのである（徳永 2003）。

雑穀は粟、黍、稗などの総称で、稲（イネ米）に対する蔑視された穀類の意味をもつ。米＝稲は穀物としての意味よりも極めて政治的な穀物で、国家支配の道具になった穀物である。従って、イネも五穀であるが、その内容は変化し、一般的にはイネ科やマメ科の作物と理解できよう。

注 18： 新村出編 1998、広辞苑第五版、岩波書店。ごこく【五穀】①人が常食とする五種の穀物。米・麦・粟・豆・黍または稗など諸説がある。②穀類の総称。

注 19： 金田一京助・柴田武・山田明雄・山田忠雄 1991、三省堂。ごこく【五穀】①五種の穀物。イネ、ムギ、アワ・キビ・マメ。広義では穀物の総称。

徳永光俊 2003、第五章江戸農書にみる雑穀、木村茂光編、ものから見る日本史雑穀、青木書店。